短編
なぜ？
YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆
Duo-Yamanka

なぜ？

山中與隆

目次

なぜ？　1
編者あとがき　86

なぜ？

作　山中與隆

まるで宇宙のどこかに人知の及ばない巨大な存在があって、私たちがしようとしていることをあらゆる手を使って妨害しようとしているのかと思うときがある。私たちは不利な状況が発生しても、なんと

か乗り切ろうといろいろな手段を講じるのだが、それならとばかりに妨害を強めてくる。それが幾重にも覆いかぶさってくると、やはり何者かが私たちの計画を妨害しているとしか思えなくなってくる。そして彼らは計画が不可能になるまでとことん追い詰めてくるのである。

私はそんな体験をした。もちろん私たちの計画というのは犯罪的な悪事などではないし、むしろ関係

者にとっては前向きな喜ばしいものであったはずである。少なくとも私はそう思っている。しかしその妨害の執拗さは、あくまでも実行しようとすると、私たちの知らないところで、さらに誰かが不幸に見舞われるのではないかと不安にさえなってくる。

それはある夏の北海道から始まった。

私は、たまたま舞鶴から小樽までのフェリーの格安広告を見たことから、急に北海道旅行を思いついた。友恵に話したら二つ返事で乗ってきた。無理かなと思いながら奈々子にも話した。奈々子には三歳と一歳の子供がいる。やはり奈々子は残念ながらパスということになった。私は友恵と二人で行くことにした。奈々子には悪いが、彼女は私たちとは関係ないところで家族とドライブを楽しんだりしている

のだから、
「二人だけでずるい」
などといっていたが今回は我慢してもらうことにした。
私たちは、音大在学中からピアノトリオを組んでいて、いまもときどき演奏会をしている親友同士である。奈々子はピアノ、友恵はチェロそして私はバイオリンである。このトリオは音楽的にも人間的に

も相性が良く卒業後もずっと続いている。
ピアノの奈々子は卒業して三年で結婚したが、友恵と私は三十を過ぎたいまも独りものだ。
こんどの旅行は車ではなくのんびりと鉄道、フェリー、バスなどの旅を楽しむことにした。十日間という長い旅で、メインは二人とも行ったことがない憧れの利尻島と礼文島である。リュックに二週間分の荷物を詰め込み、利尻島を歩いて一周しさらに礼

文島のトレッキングコースも歩くことにした。
私たちは、利尻島を二泊しながら一周してから礼文島に渡った。礼文島には夕方着き、民宿の送迎バスで北部の久種湖の近くにある宿に泊まった。この地方はずっと天気が悪かったらしいが、利尻島での三日目からは、地元の人も利尻富士がこんなにすっきり見えるのは何日ぶりだろうというほどの好天に恵まれた。それは礼文島に渡ってからも続いた。礼

文島の二日目はトレッキングコースを歩いて景色とお花畑を存分に楽しんだ。その日の宿はペンション『桃岩』である。それは礼文島の玄関口である香深港の近くにある。たまたま旅程の都合でこのペンションに泊まることにしたのだった。

私たちは朝早くから十時間以上歩いて、昼は民宿で作ってもらったおにぎりだけで、腹ペコだった。やっと食事にありつけるとわくわくしながらペンシ

ョンの食堂に下りて行った。配膳の間、トレッキング中にあったことを夢中で話した。友恵と私は、初めての礼文体験で興奮気味だった。そこへ配膳をしていた若い娘さんがこの日のメインと思われる鍋の材料を運んできたが、私たちの話が耳に入ったと見えて、話しかけてきた。

「トレッキングですか？どのコースを歩かれたのですか？」

「八時間コースです。そのあとも林道を歩いたのでくたくたですが、お天気が良かったので最高でした」と友恵がニコニコしながら答えた。

「私も八時間コースは二回経験がありますが、結構厳しかったでしょう」

と娘さん。

「でも私たち、広島なんですが、あっちでもよく山歩きしているので、大丈夫でした」

と私が補足した。確かに時間は長かったがアップダウンが知れているので、私たちはそれほどきついと感じなかった。

「でもお疲れさまでした。ゆっくり食事を楽しんでください」

そういって、娘さんは厨房のほうに戻っていった。

「感じの良い方ね。それに都会的な感じしない？」

友恵が小さな声でいった。私も同じことを思った。

私は彼女が入って行った調理場のほうを見ながら、
「私もそう思ったわ。きれいな方だしね。もしかしたらあすこに置いてあるピアノでも弾くのじゃないかしら」
食堂の隅にはよく磨かれた栗色のグランドピアノがあり、私はここに入ったときから気になっていた。もっともこの島の宿は民宿がほとんどだが、ペンションというからにはちょっと洒落た感じの食堂とピ

アノくらいあっても不思議ではない。
「それとも、都会の大学生が夏休みの間なんかにこういうところでアルバイトするってよくあるんじゃない？」
だから彼女が弾くとは限らないが、いかにもピアノを弾く姿がぴったりのような雰囲気の女性だった。
この日は、八つあるテーブルの七つに客がついて

いた。そのうちの五つには物静かな中年夫婦で、他のテーブルには聞こえないくらいの声で話している。一組だけ若い男性の四人組がいた。四人とも真っ黒に日に焼けていて話す声も大きい。他の客の中では何だか浮いたように見えた。

配膳があらかたすんだころ、女主人らしい人が出てきて挨拶をした。女主人を一目見たとき、さっきの若い女性と親子であることがわかった。

「みなさま、今日はペンション『桃岩』をご利用いただいてありがとうございます。桃岩といいますのはこの直ぐ裏の山に行くと見られる奇岩のことで、まだの方はとてもいいところなので是非行かれることをお勧めします。三十分くらいで行けるところです。

さて、礼文を楽しんでこられた方も、これから楽しまれる方も、今日はどうぞごゆっくりとおくつろ

ぎください。

なお、食事がおすみになったころ、私どもの娘が少しばかりピアノを演奏させていただこうと思っております。まだ勉強中の身ですが、たまたま夏休みで帰っておりますので、お耳汚しとは思いますが、お時間と興味がおありの方はごゆっくりしていってください」

やはりピアノはあの娘さんが弾くらしい。勉強中

で、夏休みというところを見ると、札幌かどこかで音楽の勉強中なのかもしれない。私たちは思わぬチャンスに恵まれたと喜んだ。

私たちの話題は、今度はトレッキングから、彼女が何処の学校だろうとか何を弾くのだろうなどと音楽の話に移っていった。

そのとき、友恵と背中合わせのテーブルについていた若い男性四人組のうちの一人が、振り返って、

「すみません。音楽に興味がおありなんですね」
と話しかけてきた。
陽に焼けたカッコいい青年であった。ただ四人とも三十過ぎの私たちよりはずっと若そうである。友恵が、
「ええ、ありますけど、」
と答えると、
「このペンションのお嬢さん、里香さんていうんだ

けど、めちゃくちゃピアノ上手いですよ。もうすぐ卒業だけど彼女、優等生です。ショパンが得意らしいけどそれだけでなく、ベートーヴェンでもバッハでもすっごく深い演奏するんですよ」

「演奏を聞いたことあるんですか」

と私が聞くと、

「俺たち、同じ学校ですから。彼女、東京では結構あちこちから演奏頼まれたりしています」

「じゃあ、みなさんもなにか楽器されるんですね」
と聞くと、
「ええ、俺たち彼女の後輩なんだけど、いま学内で弦楽四重奏組んでるんです。来年の大阪のコンクールに出たいと思っています」
と四人の中ではやや大人っぽいのがいった。そして特に陽に焼けた小柄の男が、
「ぼくたち、里香さんがペンションやってる家の娘

さんだと知って、北海道旅行を計画したのです。自転車の無銭旅行ですけどね。大体はテントで、ときどき風呂に入るために道の駅などに泊まります。今日はこの旅行では最高の贅沢ですよ」

弦楽四重奏やってるんだったら、最初に振り返って友恵に話しかけたカッコいい青年はチェロ、里香というここの娘がめちゃくちゃ上手いといったちょっとおしゃべりっぽい男は第一バイオリンじゃない

だろうか。小柄なのは第二バイオリンに違いない。ということは、ただニコニコして座っている男がビオラということになる。私は若者たちの話を聞きながら、そんなことを想像した。いわなければいいのに友恵が、

「私たちもピアノトリオしているんですよ」

といってしまった。東京の音大生たちに名乗り出るようなものじゃないのにと私は思ったが、案の定青

年たちはその話に乗ってきた。楽器は何か、何処で勉強したのか、いまどんな活動しているのかと彼らも興味津々らしい。それも無理はない。こんな北の地で、思いがけなく音楽をしている者同士が出会ったのだから。

しかし、彼らは私たちが卒業した広島の音楽学校の名前を知らなかった。私はこの話に深入りするのが嫌だったが、友恵はそうは思わないらしく、ペチ

ヤクチャと私たちのことを喋った。どうも友恵は最初に話しかけてきた青年が気に入ったみたいだ。

そのときさっきの娘さん、つまり里香さんがやってきて、あなたたちお話しするのだったらテーブルくっつけましょうかといって、私たちの返事も待たずに、四人のテーブルを私たちのテーブルに着けて椅子を並べ替え、六人用の席にした。配膳をしながら音楽の話が出ているので、注意していたようだ。

六人の大きなテーブルになった私たちは、周囲のもの静かさよりワンランク大きな声で話し続けた。そのうち周囲も少し大きな声で話し始めていた。私はちょっと迷惑になっているかなと思ったが、

「まあ、いいか」

と話し続けた。楽しい夕食であった。やはり若い男性たちと話すのはいいものだ。友恵もそう思っているようだった。

母親と、同年輩の女性とで各テーブルにデザートとコーヒーが運ばれている。やがて、前の方で拍手がした。里香が先ほどとは違って清楚な服装でピアノの前で拍手に応えてお辞儀をしている。食事をした客がみんなそのまま席に残っていた。

プログラムも何もないコンサートだが、彼女は直ぐに弾き始めた。ベートーヴェンの『月光』ソナタだった。おりしも白い窓枠の外は月が明るく出てい

るのか、家々の屋根や木々がはっきりと見えている。コンサート会場としては狭い部屋だが、心地良い響きが部屋を満たした。『月光』ソナタの三つの楽章を弾き終えた里香は立ち上がって丁寧にお辞儀をした。今日の予定はこの曲一曲だけだったらしく、里香は奥に引っ込んでしまった。しばらく拍手が続いたので、再び姿を現した里香は、

「ありがとうございます。ではもう一曲弾かせてい

ただきます」
といって弾き始めたのは、バッハの『シチリアーノ』であった。
さきほどベートーヴェンやバッハでも深い演奏をするといった若者の言葉の通り素晴らしい演奏だった。三十分足らずの短いコンサートはそれで終わり、客は満足そうにそれぞれの部屋に戻っていった。私たちも

「じゃあ」
といって席を立とうとしたとき、里香がやってきて、
「いま母がお茶を入れて来るから、もう少し待って
て。お話があるの」
といって、小走りに厨房に戻って行った。それから
里香は、ピアノを弾いた服にエプロンをしただけの
姿で、忙しそうに各テーブルを片付けはじめた。
私はその里香に向かって、

「素晴らしい演奏でしたね」
と声を掛けた。彼女は笑顔で会釈しただけで、テーブルの片付けに集中していた。里香の母親が茶を運んで来たころ、里香のテーブルの片付けはあらかたすんでいた。
里香と彼女の母親も加わって、弦楽四重奏団の四人、友恵と私の八人が、さきほど六人で食事したテーブルを囲んだ。口火を切ったのは母親だった。ま

ず、自分は節子だと自己紹介してから、
「来年このペンションの二十周年になるのね。それに関するいくつかのイベントを考えているのだけど、そのうちの一つとしてコンサートをしたいと思っているの。里香と、同じ大学の弦楽四重奏の皆さんでと考えていたのだけど、さっき里香から聞いたところでは、広島からのお二人も音楽家だと聞いたので、良かったらこのイベントに参加していただけないか

しら」
「ぜひ、ぜひ」
などと若い男性たちからも声が上がった。
この夜の偶然の集まりが、思わぬ方向に発展しそうな気配となって来た。私はすぐにピアノの奈々子のことを思い浮かべた。仮にこの計画に乗るとしても、来年では、まだ彼女は北海道に演奏に来ることは無理だろう。そうだとしたら、私たちがピアノト

リオで参加しようとしたら、ピアノは里香に頼むことになりそうである。

「あなたたちは、もう来年そのイベントに乗ることになっているのですか」

友恵が、最初に話しかけてきたカッコいい、私がチェロではないかと思っている男に聞いた。

「いや、里香さんからそれとなく聞いてはいました

が、具体的にはいまのお母さんの話が初めてです」
私にはこの話が進んでしまう前にどうしても確かめておきたいことがあった。しかし話の成り行き上そのことは、私が口にしたとしても、私たちの前では、誰も思ったとおりに意見をいうことが出来ないような内容だと思った。しかし私は、敢えて話すことにした。
「その音楽のイベントは、いまここにいる人たちで

するのですか？つまりこれ以外にも出演者がいるのですか？」

直ぐには、誰も発言しなかったので、私は続けた。

「里香さんのピアノは先ほど聞かせてもらいましたが、素晴らしいものでした。それから弦楽四重奏の皆さんは来年の大阪のコンクールを目指すといっておられましたよね。私は二年前に、前回のそのコンクールを聞きに行きましたが、大変なハイレベルの

コンクールじゃないですか。それらのことから考えて、私たちなんか錚々たるみなさんたちの中に紛れ込んだアマチュアに毛の生えた程度でしかないのだから、一緒に演奏するなど無理ですよ。だってみんさんは誰も私たちの演奏を聞いたことないでしょ」

思ったとおり、直ぐには肯定する意見も否定する意見も出てこなかった。この問題は、関係者が互いに出演者たちの演奏を聞いたことがあっておよその

レベルを知っている場合であれば、なにも問題はない。しかし地方の音大を出て、ピアノトリオをしているという本人たちの話だけからでは、私がいうとおりであるとも考えられるのである。節子がいった。

「おっしゃることももっともですね。でも私としては、どちらかというと内輪のコンサートなのですから、たまたま今日集まった若者たちが意気投合して『やろうよ』ということになっただけで充分だと思

いますよ。上手いかどうかなど誰も気にしませんよ。あなたたちがアマチュアの初心者でないことは確かなのですから。広島でピアノトリオのコンサートを何年も続けておられるということだけで充分じゃないですか」

「そうですよ、大阪のコンクールといっても、参加するにはテープ審査があって、世界中から応募があるのだから、参加できるかどうかなんかまったくわ

からないんだから」
私がファーストバイオリンと予想した男がいった。
「そうなの。なんだ。もうコンクールに出られるのかと思ってた」
と里香。
「もちろん出られるように頑張るつもりだけど、前回うちの学校を卒業してから活動していた弦楽四重奏のグループが応募したけど、テープ審査ではねら

れたの知ってる？俺その人たちの演奏、聞いたことあるけど、ものすごく上手いと思ったんだけどね」
「でも皆さん、凄い世界で音楽活動してるのですね。私たちなんか、たんなる手慰めみたいなものよね」
友恵が、同意を求めるように私に向かっていった。
結局この夜はこの程度の話でおわり、翌朝私たちは稚内に向けて出発した。弦楽四重奏の四人は、これから自転車であちこち島内を回るとのことだった。

別れ際に節子がいった。

「夕べいったように、私はこれをご縁に是非出てもらいたいと思います。あまり無理強いもできませんが、何とか前向きに考えて、良いご返事をお待ちしていますからね」

この話は一度よく考えてから返事をするということになった。

広島に戻った私たちは奈々子を訪ねた。奈々子は一歳の女の子を抱いて玄関に出てきた。その後ろから三歳の長女が母親のスカートに掴まるようにしてちょこちょこついてきた。奈々子はピアノを弾いていたところだといって、音楽室に二人を案内した。防音が施してあるこの部屋で奈々子は生徒を教えている。ピアノを弾く母親の側で子供たちが遊んでいたと見えて、遊び道具が部屋中に散乱していた。

「ご覧の通りよ。足の踏み場も無いけど我慢して。そこいらに適当に座って。こんな状態だから長い時間は練習できないのよね」

奈々子は自分の現状を訴えた。しかし、かわいらしい女の子二人に纏わりつかれて、まんざらでもないような笑顔であった。

私たちは北海道の演奏の話しをしようと思ってきたのだが、一年後にこの状況が大きく変わることも

なさそうだと思うと、やはり北海道で奈々子と三人でトリオをすることは無理だと感じた。それでも一応ペンションでの話を報告した。奈々子は、せめて下の子が三歳くらいになってからだったら、主人に夏休みを合わせてもらって一緒に子守としてついてきてもらうこともできるのだけど、と残念がった。初めから無理だろうと予想していた私たちが、奈々子の代わりにペンションの娘里香にトリオのピアノ

を弾いてもらうことをいい出そうとしたときだった。
奈々子が、
「私、なんとかするわ」
と、
『あなたたちだけに良い思いはさせないわよ』
といわんばかりに、決然といった。
「なんとかする」
奈々子は自分にいい聞かせるようにもう一度いった。

私たち、奈々子の予想外の言葉にびっくりしたが、もとより可能なら嬉しいことなので歓迎した。しかし、実現するのだろうか。

数日後奈々子からメイルが入って、来年の北海道行きにご主人も喜んで協力するといっていることを伝えてきた。

トリオを一曲演奏するために大きな労力と時間と費用を賭けることになりそうだが、年に一度か二度

の発表会をしているとはいえ、本格的なコンサートプレイヤーではない私たちにとっては、ペンションで頼まれた演奏会は大きな、しかも楽しみな行事なのである。もちろんギャラはなしだと思うし、宿泊費くらいは持ってもらえるかもしれないが。旅費は自分持ちに決まっている。

私は、先方に出演できることを伝えていいかどうか、もう一度奈々子に確かめた。奈々子が大丈夫と

いうので、私はペンション『桃岩』に電話した。ペンションの夕食でコンサートの話が持ち上がってから二週間が経っていた。

電話には節子が出た。里香は既に大学に戻っていた。私は、本当に私たちなんかでいいのか、何度も念を押した。それにたいして節子は、まったく問題ないことを強調して、はるばる遠くから参加してもらえることは、本当に嬉しいといって喜んでくれた。

そして、たくさんは出来ないけど多少は御礼も考えさせてもらうともいった。それについては、お礼をもらうような演奏家ではないからと一応遠慮した。演奏時間のことなども聞いたが、コンサートについては里香に任せることにしているので、具体的な日程も含めてあらためて里香から連絡させるということだった。

節子の言葉から、旅費のことなどを心配している

のかも知れないと思って、念のためピアニストが二人の幼児と夫の四人連れになるので、合計六人で押しかけることを伝えておいた。

数日して里香からメイルが入った。それは参加してくれることになって嬉しいという感謝の言葉と、演奏曲などについてのかなり長いメイルだった。

里香の考えでは、演奏するのは私たちのピアノトリオ、例の弦楽四重奏団、地元香深でギターをやっ

ている青年のソロ、それに里香自身のピアノソロの四組で、全体で休憩を入れて約二時間を考えているという。私たちには三十分程度の内容で、一曲でもいいし、短いものを集めて三十分くらいにしてもいいということだ。ちなみに弦楽四重奏は、来年五月に大阪のコンクールで演奏するつもりのモーツァルトの有名な作品を取り上げたいといっているそうである。また里香自身はベートーヴェンの『悲愴』ソ

ナタを弾くことにしているようだ。ギターは何を弾くかまだ聞いていないが十五分くらいかなと書いてあった。

弦楽四重奏もピアノソロも結構本格的なクラシックを考えていることがわかった。私は友恵を誘って楽器持ちで奈々子の家に集まって演奏曲を話し合った。コンセプトは、本格的なクラシックだができるだけポピュラーなものということになった。このコ

ンサートでは、これまでに街角コンサート的な催しで私たちがやって来たアニメ主題歌や日本の歌のピアノトリオ編曲ものなどは考えないことにした。本格的な曲に取り組めるのは、私たちにとっては嬉しいことだ。

その方針で、いろいろな曲が挙がったが、結局ピアノトリオといえば誰もが真っ先に挙げるメンデルスゾーンの『ピアノトリオ第一番』と親しみやすい

メロディがふんだんに出てくるドヴォルザークの『ドゥムキー』のどちらかということになった。どちらもメンバーみんなが大好きな曲である。それにどちらをとっても演奏時間は全曲で約三十分というのもちょうど良い。来週この二曲を弾いてみて、どちらかに決めようということになった。

私は里香にメイルで自分たちの候補曲二曲を示して、彼女の意見を求めた。すぐに返事が来た。彼女

は、どちらでも良いと思うが自分としては、その二曲だったら『ドゥムキー』が好きだと書いてあった。

私たちは両方を実際に演奏して、結局『ドゥムキー』に決めた。それにはチェロの友恵の強力な推薦が決め手となった。この曲にはチェロの素晴らしいメロディが満載なのである。私たちは、来年五月のトリオの定期発表会がすんだら『ドゥムキー』の練習に入ることにした。

その後礼文島の節子からペンション『桃岩』の二十周年記念イベントは八月の初めから十日ころにわたって行いたいので、その間の何時コンサートをするかを里香が調整するとの連絡があった。

年明けにはペンション『桃岩』から、二十周年のイベントをするので、この夏には是非礼文島においでくださいと印刷された年賀状が届いた。コンサー

トを含むいくつかのイベントも紹介されていた。コンサートは昨年の日程調整で決まった八月六日の夜と明記されていたが、出演者については研鑽中の音楽仲間たちによるとしてあった。年賀状の中心には玄関上の二階部分に大きく張り出したデッキが特徴的なログハウススタイルのペンションがカラーで印刷されている。

余白に、コンサートでお会いできるのを本当に楽

しみにしているとのコメントが里香、節子の連名で書き添えてあった。

私たちも、いよいよこの夏の北海道旅行というビッグイベントに向けて始動したのだ。

ところが、三月の初めに里香から思いもかけないメイルが入った。例の弦楽四重奏団が解散したというのだ。したがって夏のペンションのイベントに彼

らは参加しないことになったというのである。解散の理由などは書いてなかったが、ひとこと

『大阪のコンクールのことなどで、』

との文言から、私はコンクールが上手く行かなかった、つまり予備審査を通過できなかったのではないかと想像した。弦楽四重奏団というものは、熱い思いの四人が集まって燃えるように始まるが、何らかの切っ掛けで急速に醒めて解散に至ることは珍しく

ないと聞く。今回の彼らの場合もそうなのだろうか。

数日後、里香からまたメイルが入った。解散してしまった弦楽四重奏団が抜けた後のことであった。里香によると、代わりにやってくれる室内楽のグループを探したが、礼文島まで来てくれるというグループは見つからないので、私たちのピアノトリオと、里香自身のピアノ独奏それにギターの青年で何とかプログラムを満たしたいというのである。私たちに

は、『ドゥムキー』一曲だけでなく、もう一曲準備してほしいということだった。それは、私たちにとってはわざわざ北海道の果てまで行くのだから、二曲演奏できるほうがありがたい。私はすぐに友恵と奈々子に相談してから了承の返事を書いた。曲目はもうひとつの候補曲であったメンデルスゾーンのピアノトリオに決まった。

里香から協力を謝するメイルがあり、自分は『悲

愴』ソナタのほかにモーツァルトのピアノソナタを弾くことにするとあった。そのメイルには、弦楽四重奏団の解散の事情が少し書いてあった。それによると、例のコンクールはテープ審査で落ちたのだが、そのあとで内輪もめが起きて『空中分解』したのだそうだ。里香としては、約束したコンサートだけはやってもらえないかと頼んだが、互いに顔を見るのも嫌だから出来ないということだったそうだ。いず

れにしても私たちにとっては悪い成り行きとはいえない。私たちのトリオは、かえってやる気が上がった。

五月。私たちが毎年開いている本格的な曲による定期発表会がすんで、北海道で演奏する曲の練習に入ったころ里香から連絡があった。私たちのトリオの名前と三人の名前と簡単なプロフィールを送って

くれとの依頼だった。いよいよ本番に向けて動き出した感がある。私たちはトリオ・カシオペアの名で定期発表会をしてきたので、その名前で出ることにした。私たちは、

「トリオ・カシオペアついに北海道デヴュー」

といってはしゃいだ。

ピアノの奈々子の夫が急にタイに六個月の出張を

命じられたのは、それから間もなくであった。夫が一緒に礼文島に行ってくれるということで成り立っていた奈々子の参加は、頼みの夫が駄目になってしまったのでは難しい。それでも奈々子は初めのうちは、両親に一緒に行ってもらうとか母親は行きたがっているなどといって、こんなことでは引き下がらないという姿勢を見せていたが、そのうち父親の体調があまりよくないので、そんな父親を置いて母親

だけ北海道についてきてもらうわけに行かないという話しになってきた。そして、ついに奈々子は、

「私、今回は諦めるから向こうの人にピアノやってもらって」

といい出した。体調が悪いといっていた父親が入院してしまったのだ。これで母親についてきてもらう線は完全に消えてしまった。弦楽四重奏団にキャンセルされて、他の出演者の曲目を増やしてコンサー

トを乗り切ろうとしているのだから、私たちまでピアニストが行けないからといってキャンセルは出来ない。私は里香に事情を話して奈々子の代わりにトリオのピアノを受け持ってくれないかと頼んでみた。里香はあっけないほど簡単に引き受けてもいいといった。曲目が増えて負担のはずだが、きっと自信があるのだろう。ただ問題は事前の合わせ練習をどうするかということだった。里香は私と友恵が東京に

出てきてくれたら合わせができるというし、私たちは里香が広島に来てくれたら宿泊つきで練習できると主張しあった。そのどちらも出来ないことではなかったが、実際にはそう簡単ではないし、何度もというわけにはいかない。

とりあえず二曲のピアノトリオの楽譜だけは里香に送った。結局里香は七月の中旬にはペンションに戻るので、私たちも七月下旬くらいからペンション

に行って合宿のつもりでじっくり練習をしようということに落ち着いた。もちろん宿泊と食事は無料でかまわないというので、私たちにとってはかえって贅沢な夏休みとなったのである。友恵と私は、ついでに礼文島の行事の前後にも北海道の各地を楽しむために車でドライブを楽しみながら行くことにした。今年も一緒に行けなくなった奈々子をよそに、会うたびにさまざまな旅行計画で盛り上がった。友恵と

私はワクワクしながらドライブのコースを話し合った。そして敦賀から小樽のフェリーを予約し、礼文島以外の宿の予約も着々と進めた。出発は七月十五日、ペンション『桃岩』には二十八日に入ることにした。コンサートまで一週間以上あるので、初めて共演するピアニストではあるが、とても上手い人なので時間的にはそれで充分である。

子守をしながら、単身で海外出張する夫の留守を

まもることになった奈々子も、私たちの出発までの間、快くトリオの練習に付き合ってくれた。

いよいよ出発を一週間後に控えた七月八日、こんどは私の母がくも膜下出血で倒れた。救急車で運ばれて即刻手術となった。処置が早かったために一命は取り留めた。

父は仕事があるので、昼間比較的時間のある私が

病院の付き添いをした。母が倒れたときには動転して、礼文島でのコンサートのことには頭が回らなかったが、少し冷静になると大変な問題が起きたことに気付いた。幸いに母の手術は成功して、とりあえず快復する見通しとはなったが、当分入院は続くだろうし、退院しても私がついている必要がある。

まず、七月十五日に出発して、悠々とドライブしながらペンションに向かうという計画は取りやめて、

フェリーと宿は全てキャンセルした。コンサートは八月六日の夜なので、私たちは飛行機を乗り継いで八月四日中にペンション『桃岩』に入り、不十分ながら五日、六日と練習して本番に備えることを打ち合わせた。もちろん帰りも本番がすんだらとんぼ返りである。私は、友恵はゆっくりして帰ってきたらと勧めたが、一人では面白くないからと、彼女も私と一緒に帰ることになった。

私が留守の間父が頑張ってくれることになった。航空券と楽器運搬用のケースの予約も取れたので、このスケジュールが確定した。母の様態は安定しており、後は快復を待つだけと医者もいうので、ひとまず安心である。

出発三日前の八月一日の午後、病院の母の部屋で何気なくテレビのニュースを見ていたら、ヘリコプ

ターの映像が何だか見覚えのある建物を映し出している。よく見るとベランダの脚が折れて、前側が玄関前の地面に落ちている。建物側は二階部分についたままなので、ベランダの床が滑り台のように傾いているのだ。私はテレビのボリュームを上げた。コメントによると、二十周年に招待した宿泊客が全員で記念写真を撮ろうとベランダに集まったとき、脚部がその重量に耐えられず折れたというのである。

ベランダに乗っていた人たちは全員折り重なるように前庭に滑り落ち、多数の重軽傷者が出ているという。幸いに今のところ死者は出ていないそうだ。ニュースでもはっきりとペンション『桃岩』といっていた。

なんということだ。

私は直ぐ里香の携帯に電話した。携帯からは

「いま電話に出られません」

という録音の声が流れてきた。私は里香も大怪我をしたのではないかと胸騒ぎがした。ペンション『桃岩』に電話してみた。男性の声で応答があった。事情を話すと、自分は手伝いの者で、節子さんも里香さんも病院に行っているので、お電話があったことを伝えるといった。私は事故のことも、里香たちの詳しい状況も聞きたかったが、取次ぎの男性の雰囲気があまり深刻そうでなかったので、里香からの連

絡を待つことにした。
イベントは中止になるに違いないが、いずれにしても一刻も早くきちんとした連絡が取りたい。
夜になって里香から電話があった。
「私も母も、ペンションの者たちは後ろの方にいたので、落ちたのは一緒だったけど、大勢の人たちの上に滑り落ちた感じで、母が脚をくじいたくらいで、私は擦り傷くらいですんだの。怪我をされたお客様

には申し訳ないのですが・・・お客様の中には重傷の方も五人いらっしゃって、それ以外の方も何人も怪我をされたので大変です。

まだ今の段階では、イベントの中止を正式に発表していないけど、それは発表が間に合ってないだけで、明日の朝には発表して、予約のお客様にも連絡することになります。

こんなことになってごめんなさいね。いまは怪我

をされた方々への対応が最優先なので許してくださいね。将来『桃岩』が再開できたら、必ずこの埋め合わせはしますからね。友恵さんにもよろしく、よろしくお伝えください」

そして

「本当にごめんなさい」

と付け加えた。

電話の後ろで忙しく連絡を取り合っているような

様子が聞えていた。その中にてきぱきとした節子声も聞こえたような気がしたので、足をくじいたということだが、大事に至らなかったらしい。

私は大急ぎで航空券のキャンセルをした。かくして一年前の夏に持ち上がった私たちにとって大きなイベントは消えてなくなった。当のペンション『桃岩』にとっては、イベントを中止するだけでは終わ

らない多くの処理すべき難問が覆いかぶさったわけだから、私たちが残念がることなどものの数ではない。

一方私たちにも、普段なら起こらないような出来事がこの一年にいくつも起きた。しかし、私たちには一応日常が戻った。

それにしても不思議な一年間だった。目に見えな

い巨大な力が作用したのだとしたら、親の看病や、子守をひとに任せて自分たちが楽しく演奏に出かけたりしようとしたことへの戒めだったのだろうか。しかしそのために、弦楽四重奏団を解散させ、私たちとは直接関係のない人たちを巻き込んで多くの怪我人まで出すとは一体なぜなのか。何者かの妨害の意図はいったい何だったのだろう。

奈々子の夫の海外出張が決まったとき、あるいは

奈々子や私の親が入院した時点で北海道行きを諦めるのだ正しい選択だったというのだろうか。そうしていたら『桃岩』のベランダは崩落しなかったのだろうか。

誰かに迷惑をかけるような自分たちの行動を戒めるというのだったら、善意で企画されたコンサート実現のためにあらゆる努力をせずに、こちらの都合であっさりキャンセルする方が正しいというのか。

それともこれらの出来事は、それぞれの事情によって起きた単なる偶然が重なったに過ぎなかったのだろうか。

（了）

＊この物語はフィクションです。登場する人物や施設などはすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

なぜ？

2022年9月30日初版発行
著者：山中興隆
編集：山中伶子
表紙素材元：www.photo-ac.com
・タイトル：避暑地のペンション
作者：菱田光桜さん
写真のID：2231560
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com